





学位審査結果報告書

学位申請者名	糸澤幸子	学生番号	27059001	専攻名	観光学専攻
論文題目	コロナ社会と共存するクルーズツーリズムの在り方 —発展・安全・貢献の視点から—				
論文審査及び最終試験の成績（表記は合格又は不合格とする。）				合格	

審査委員会

主査 辻本 勝久  委員 遠藤 伸明 

委員 藤生 慎  委員 竹田 明子 

〔論文審査の結果の要旨〕

1. テーマ

新型コロナウイルス感染症（以下、新型コロナ）の世界的流行の中で、クルーズ船の安全な運航とクルーズツーリズムの存続が大きな課題となっている。本研究の目的は、この課題解決を目指し、発展の視点、安全の視点、貢献の視点から分析を行い、アフターコロナを含むコロナ禍の社会（以下、コロナ社会）と共存するためのクルーズツーリズムの在り方を提示することにある。

このように本論文のテーマは時宜に即しており、重要かつ明確なものと評価できる。

2. 構成力

この論文は6章で構成されている。第1章は序論であり、研究の背景、目的、位置づけなどが述べられている。第2章では予備的考察として、コロナ社会におけるクルーズ船を取り巻く環境変化などが述べられている。第3章では「発展の視点」として、クルーズ船社を大衆化船社と個性化船社に分け、新型コロナウイルス感染状況を比較分析している。第4章では「安全の視点」として、クルーズ船の安全性に有効な感染対策マネジメント要素の特定がなされ、対策が提示されている。第5章では「貢献の視点」として、コロナ社会に貢献するクルーズ船の多角的活用について論じている。第6章では、コロナ社会と共存するクルーズツーリズムの在り方に関するま

とめがなされ、残された研究課題が整理されている。

以上のようにこの論文は、一定の論理性・体系性を持って執筆されており、構成力の面では博士学位論文の水準に達していると言える。

3. 独自性

本研究は、新型コロナパンデミック 1 年目のクルーズツーリズムを対象とした実証分析によって、1) コロナ社会においてもクルーズ船の二極化による発展は継続すべきか、2) コロナ社会のクルーズ船は安全なのか、3) コロナ社会に貢献するクルーズ船の多角的活用とは何か、という「発展」「安全」「貢献」の 3 方面からの問いに対する答えを見いだした上で、コロナ社会と共存する持続可能なクルーズツーリズムの在り方を提示しようとしている。

クルーズ船における感染症対策に関する先行研究はいくつか存在するものの、本研究は新型コロナウイルス感染の波が繰り返し押し寄せるまさにその最中において、持続可能なクルーズツーリズムのあり方を扱ったという点で先駆性を有している。さらに本研究は、「発展」「安全」「貢献」の 3 方面からの考察を行い、総合的な施策提示につなげようと試みている点において、一定の独自性を有するものと評価できる。

4. 位置づけ

クルーズ船に蹴る感染症対策に関する先行研究はいくつか存在する。その中で本研究は、新型コロナの感染拡大から 2021 年 11 月にいたる約 2 年間を対象として、「発展」「安全」「貢献」の 3 側面から、持続可能性向上のための総合的な検討を行ったものである。コロナ社会下のクルーズツーリズムを対象とした総合的な研究は貴重であり、先行研究の示唆を実証する研究であるという意味でも、本研究は明確な位置づけを備えているものと考えられる。

5. 達成度

申請者は、新型コロナと共存するためのクルーズツーリズムの在り方を提示することを目的として、発展・安全・貢献の 3 側面から研究を行った。その結果、得られた主な結果は次の通りである。

1) コロナ社会で運航を再開した世界のクルーズ船社の感染発生状況から、大衆化船社、個性化船社とも同程度で感染発生している状況を確認し、コロナ社会においてもクルーズ船の二極化は許容できるという結論を得た。

2) コロナ社会においてクルーズを再開した 13 船社を対象に、その感染症対策マネジメントを 3 つの国際専門機関や先行研究が推奨・示唆するマネジメント 20 項目と照合する形で検証し、船社間で実施数に大きな開きがあることや、実施数が多い船社ほどコロナ感染者を出さずに運航を継続できている傾向があることや、「乗客の居住地制限」と「スクリーニング検査」がコロナ対策

上重要なマネジメント要素であることなどを見いだした。本研究は、新型コロナウイルスの感染拡大から 2021 年 11 月までの約 2 年間を対象に、世界のクルーズ船社の感染対策マネジメントを記録している点でも貴重である。

3) 新型コロナウイルスへの感染が発生した 7 船社に求められるマネジメントを「寄港地マネジメント」と「偽陰性マネジメント」の面から整理し、全船社統一のマネジメントの厳守を提言した。

4) クルーズ船のホテルシップとしての活用を検討し、わが国では東京 2020 に向けた規制緩和の中で、法規制によって制約を受ける状況は終わったと結論した。

5) コロナ社会に貢献するクルーズ船の新たな多角的活用のあり方として、クルーズ船の宿泊療養施設としての活用を検討し、クルーズ船での宿泊療養体験者への半構造化インタビュー調査から、安全性と清潔感への満足度が高いことを明らかにした上で、感染拡大期におけるクルーズ船の活用が医療従事者の限定や自宅療養者の減少、療養者の無断外出防止等の点で優位性を持つことを指摘した。

6) 以上を総合して、新型コロナウイルスと共存し、コロナ社会に貢献するクルーズツーリズムの在り方の提言を行った。

以上のように、本研究は、新型コロナウイルスの感染拡大期と感染収束期の両面について、「発展」「安全」「貢献」の 3 側面から実証分析を行い、コロナ社会と共存するクルーズツーリズムの在り方を提言することができている。今後のさらなる進展に期待すべき点もあるものの、本研究の学術的・社会的意義はあり、博士学位論文として相応の達成度にあるものと評価できる。

6. 貢献度

本研究は、新型コロナのパンデミックがまさに進行している中において、クルーズツーリズムのあり方を模索した新規性の高い労作である。本研究で得られた主な結果は上述の通りであるが、その多くがクルーズツーリズムの現場における応用可能性を有しているものと考えられる。

また、本研究はクルーズツーリズムを対象とした研究分野において、新型コロナへの対応という緊急性の高い内容を速報性高く扱ったものであり、今後の当該研究分野の基盤ともなり得るものと評価できる。

[最終試験の結果の要旨]

実施日時 令和 4 年 2 月 4 日 13 時 10 分～14 時 10 分

実施場所 Zoom による遠隔開催

最終試験では、まず申請者による論文要旨の説明がなされ、続いて論文の内容に関する質疑応

答が行われた。

質疑応答における主な指摘事項は次の通りであった。

1) 「発展」の部分において、競争戦略やプライシングに関する議論が不足していることや、散布図レベルの分析にとどまっているなど、統計分析力や説得力が不足していること。また、総トン数と乗客定員から単純に二極化を論じているように読み取れること。

2) 「安全」の部分において、感染対策予防策をすべて同じ重み付けで扱っていることや、感染要因の考察においてエビデンスにもとづく因果関係の指摘が不足していること。

3) 「貢献」の部分において、医師の専門性や隔離施設の具体的内容に関する検討がなされていないことや、社会への貢献に関する定義が必ずしも明らかにはされていないこと。

4) 全体として、「発展」「安全」「貢献」の3つの視点の関係がやや曖昧であるほか、研究の緻密さや理論的インプリケーションに課題が見られること。

これらの指摘事項について、審査委員会はその場で申請者に回答させた上で、10日間の猶予を与えて、修正論文の提出を求めた。

その結果、申請者より指摘事項への対応表と、修正論文の提出がなされた。

審査委員会は、以上の論文審査と最終試験の結果を総合的にみて、合格と判定する。